

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：13201

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2023

課題番号：21K20301

研究課題名（和文）自傷行為の維持メカニズムに基づく経時的自殺リスクアセスメントの体系化

研究課題名（英文）Longitudinal suicide risk assessment based on maintenance mechanism of nonsuicidal self-injury.

研究代表者

飯島 有哉（Iijima, Yuya）

富山大学・学術研究部人文科学系・講師

研究者番号：90909714

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：自傷行為者が有する自殺リスクアセスメントの精緻化を目指す一貫として、本研究では自傷行為の維持メカニズムの経時的变化プロセスの観点から検討した。質的検討および量的検討の結果から、自傷行為の維持要因には感情調節を基盤として他の要因が重複・拡大していく一方向的な傾向がみられた一方で、これらの変化は自傷行為の反復や長期化といった経過に伴い一元的に生じるものではなく、個人が有する自傷行為に関する文脈の変化に応じて生じるものであることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

自傷行為は後の自殺既遂を予測する重要なリスク要因であることが示されている一方で、自傷行為の症状経過に応じて自殺リスクがどのように変化するのかについてはほとんど明らかにされていなかった。本研究は、自傷行為者が有する自殺リスクと関連することが示されている自傷行為の維持メカニズムの観点から経時的变化について検討し、維持要因の拡大に伴う自殺リスクの増加は症状経過や長期化に伴い一元的に生じるものではないことを示した。したがって、自傷行為者の自殺リスクアセスメントにおいては、自傷行為の持続期間の長短に関わらず、自傷行為に関するエピソードの変化について定点的な査定を実施することが重要であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research project was to refine the assessment of suicide risk in individuals who engage in nonsuicidal self-injury (NSSI). To achieve this, we examined the suicide risk in these individuals from the perspective of longitudinal changes in the maintenance mechanisms of their self-injurious behavior. The results demonstrated that the maintenance factors of NSSI exhibited a unidirectional tendency, where additional factors overlapped and expanded based on the emotional regulation function. However, these changes did not occur uniformly with the repetition or prolongation of NSSI. Instead, they can arise on response to changes in the individual context related to NSSI.

研究分野：臨床心理学

キーワード：自傷行為 自殺リスク アセスメント

1. 研究開始当初の背景

非自殺性自傷 (Nonsuicidal Self-injury: NSSI) は、後の自殺既遂を予測する重要なリスク要因であることが示されている (Franklin et al., 2017)。自傷行為者は高い自殺リスクを有する一方で、実際には希死念慮を伴わない一群や、反対に自殺企図を繰り返す一群が存在するなどその状態像は多様であることが知られており、自傷行為者における自殺リスクアセスメントの精緻化が課題とされている。研究代表者のこれまでの研究成果により、自傷行為の維持メカニズムに基づく状態像の差異に応じて自殺リスクは異なることが示唆されているが (飯島他, 2021)、維持メカニズムおよび自殺リスクが症状経過に応じてどのように変化するのは明らかにされていない現状にある。

2. 研究の目的

自傷行為には多様な状態像が存在することが知られており、その維持メカニズムによっても自傷行為者が有する自殺リスクは異なるとされている。具体的には、自傷行為の維持要因は「苦痛対処」「自己保全」「対人操作」の3種類に大別され、より多くの維持要因が重複している状態像ほど、高い自殺リスクを有していることが示されている (飯島他, 2021)。以上をふまえ、本研究では、自傷行為の維持メカニズムに基づき自殺リスクがどのような経時的な変化プロセスをたどるのかについて検討することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 自傷行為の維持要因の変化プロセスに関する記述的検討

- ①研究参加者：過去に自傷行為を行った経験があり直近1年以内に自傷行為を行っていないことを条件とし、大学生を対象にインタビュー調査を実施した。自傷行為がDSM-5におけるNSSIの基準に合致した者6名が分析対象者となった。
- ②調査内容：自傷行為を行った際の事前の状況および心理的状态と、事後の状況および心理的状态、自傷行為の反復に伴うそれらの変化について聴取した。
- ③分析方法：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA: 木下, 2006) による分析を実施した。

(2) 自傷行為の維持要因の変化に関する短期縦断的検討

- ①研究参加者：NSSIの経験を持つ20歳代の者を対象にウェブ調査を実施した。調査はそれぞれ1ヶ月の間隔をあけて3回実施され、Time 2、Time 3の調査は、直前の調査時に過去1ヶ月以内にNSSIを行った経験があると回答した者のみを対象とした。最終的に99名 (平均年齢 25.46±2.73) が分析対象者となった。
- ②調査内容：日本語版 Inventory of Statements About Self-injury (飯島他, 2021) によって自傷行為の維持要因、持続期間についてのデータを収集した。
- ③分析方法：潜在曲線モデルを用いた共分散構造分析を実施した。

4. 研究成果

(1) 自傷行為の維持要因の変化プロセスに関する記述的検討

M-GTAによる分析の結果、自傷行為の維持要因に対人操作等の対人間機能を含む場合であっても当事者にとっての主な維持要因は苦痛対処をはじめとする個人内機能であり、また、自傷行為が反復される過程において従来有していた機能が消失し入れ替わるということはなく並列し重複していくというプロセスが示唆された (Figure)。

また、機能の拡大は、自傷行為の反復によって自動的に生じるものではなく、個人が有する環境やその変化に応じて生じるものであることが示唆された。

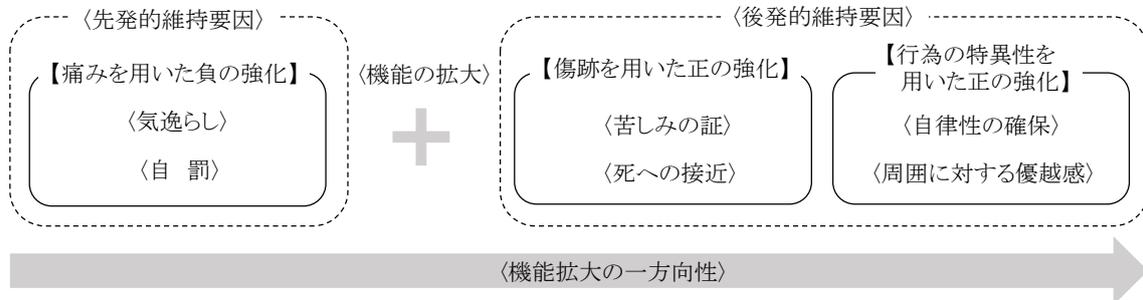


Figure. 非自殺的な自傷行為の機能における変化プロセスに関する概念関連図
【 】はカテゴリー名、〈 〉は概念名を示す。

(2) 自傷行為の維持要因の変化に関する短期縦断的検討

潜在曲線モデルを用いた共分散構造分析の結果、自傷行為の維持要因の時間経過に伴う一定の変化傾向は認められなかった。また、自傷行為の持続期間や年齢による、自傷行為の維持要因の変化傾向に対する顕著な影響性は認められなかった。

以上の結果から、自傷行為の維持要因は自傷行為の反復や長期化によって経時的に変化していくものではなく、あくまで個人が有する自傷行為に関わる文脈の個人的な変化によって生じるものであることが示唆された。したがって、自傷行為の維持要因の観点に基づけば、自傷行為者が有する自殺リスクは自傷行為の反復や長期化に伴い自動的に高まっていくものではないと考えられる。一方で、自傷行為の反復期間が長期化すれば、偶発的な環境変化によって自傷行為の維持要因が新たに生じる可能性も高くなることが考えられる。このことから、自傷行為の維持要因について、支援の初期だけでなく、常にモニタリングしていくなかで、自殺リスクアセスメントを行なっていくことの重要性が指摘できる。

なお、研究実施期間中に児童生徒の自殺者数が過去最多となったことから、新型コロナウイルス感染症の流行に伴う児童生徒のメンタルヘルス悪化や自殺リスクについても、生徒を対象とした調査を実施しその要因と個人差を分析し文献にまとめた。

主な引用文献

- Franklin, J. C., Ribeiro, J. D., Fox, K. R., Bentley, K. H., Kleiman, E. M., Huang, X., Musacchio, K. M., Jaroszewski, A. C., Chang, B. P., & Nock, M. K. (2017). Risk factors for suicidal thoughts and behaviors: A meta-analysis of 50 years of research. *Psychological bulletin, 143*, 187–232. doi: 10.1037/bul0000084
- 飯島 有哉・上村 碧・桂川 泰典・嶋田 洋徳 (2021). 日本語版 Inventory of Statements About Self-injury の開発と機能に基づく青年期における自傷行為の分類 *Journal of Health Psychology Research, 33*, 103-114. doi: 10.11560/jhpr.200511141

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 飯島 有哉, 松本 茂美, 桂川 泰典	4. 巻 25
2. 論文標題 感染症拡大下における臨時休校が中学生のストレスにおよぼす影響性とストレス反応表出プロセスに関する記述的検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学校メンタルヘルス	6. 最初と最後の頁 180-190
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24503/jasmh.25.2_160	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 飯島 有哉, 桂川 泰典, 嶋田 洋徳
2. 発表標題 非自殺的な自傷行為の機能に基づくエスカレートプロセスに関する記述的検討
3. 学会等名 日本自殺予防学会第46回総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 飯島 有哉, 桂川 泰典, 嶋田 洋徳
2. 発表標題 非自殺的な自傷行為における機能の変化プロセスに関する予備的検討
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会第48回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 飯島 有哉・松本 茂美・桂川 泰典
2. 発表標題 臨時休校が中学生のストレスにおよぼした影響性の評価 - サブタイプ分類による個人差の検討 -
3. 学会等名 日本学校メンタルヘルス学会第25回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Iijima, Y., Katsuragawa, T., & Shimada, H.
2. 発表標題 Interactions between Functions and Appraisal on Maintenance of Nonsuicidal Self-Injury.
3. 学会等名 The 10th World Congress of Cognitive and Behavioral Therapies (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 飯島 有哉, 桂川 泰典, 嶋田 洋徳
2. 発表標題 非自殺性自傷における機能の変化に関する短期縦断的検討
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会第50回記念大会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 飯島 有哉	4. 発行年 2022年
2. 出版社 桂書房	5. 総ページ数 10
3. 書名 心理的ストレスモデルからみた青少年の“コロナ禍” 富山大学人文学部 編『人文知のカレイドスコープ』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------